



Title	往還する青年のその後
Author(s)	山本, 晃輔
Citation	未来共創. 2020, 7, p. 339-344
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76169
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

往還する青年のその後

山本 晃輔

2009年3月14日。ブラジルに渡った日本移民に関する調査研究に従事していた私は、パラナ州ロンドリーナ市にやってきた。

1908年にはじまるブラジル日本移民の先鞭は、サンパウロ州における「出稼ぎ」農耕労働者としてつけられた。その後、自営農者として独立した移民は、隣接するパラナ州へと自らの土地を求めコーヒ栽培に従事した。労働者から自営農への進展は、移民の定着を促した。しかし度重なる冷害に苦しむことになる。それでも血のにじむような努力を重ね、多角的な農業を営み今日に至る。

日本移民の努力は、ロンドリーナ日本語モデル校にもみることができる。JICAの支援を受けて1991年に開校し、パラナ州における日本語教育の拠点となっている。教室だけでなく、集会に使われるホールや調理場がある。校内には子どもたちが取り組んだ習字や折り紙が飾られ賑やかだ。小さな小学校をイメージすれば、大きさがわかるだろうか。小さいとはいえ、建物を維持するために多くの浄財が持ち込まれている。

ところで、日本語モデル校のような活気は、ブラジルにおいて例外的である。日系ブラジル人の間で、日本語の継承は大きな悩みの種となっている。過去、日本語は家族のコミュニケーションに不可欠だったが、いまでは日本語を覚えたとしても使う場所がないため、習い事の延長線上に位置づいている。それなら英語を学ばせたほう

が良いというのが日系ブラジル人の教育方針だからである。

かれこれ50年以上、ブラジルでは日本移民とはなにか、日系人とはなにかが問われてきた。血の歴史なのか。言葉や文化の継承なのか。ところが、時代の趨勢は決したとも言われる。日本語の書籍を扱う書店は見かけなくなった。集会やイベントはポルトガル語で行われる。邦字新聞も1紙が残るのみだ。日本移民は4世代目にして、ブラジル人として生きることになった、ということだろうか。日本移民の歴史が、これまでにはないかたちへと変貌し、なにかしらの断絶の危機に瀕している。

それでもなお、各地の日本語学校では、日本語と日本文化の継承を続けている。確かなことは、100年以上前に日本人がブラジルに「出稼ぎ」として渡ったこと。その後、ブラジルから日本へと日系人が「デカセギ」として渡ったこと。そうした日系人が、日本において「ブラジル人」扱いされようとも、とにもかくにも「日本語」を軸に自らを表明し続けようとしていることであり、そこになんらかの意味を見出していることである。

一方で、日本において日系ブラジル人は「外国人」「ブラジル人」として認識されがちである。他方で、ブラジルにおける日系ブラジル人は、日本文化の継承者であり、「外国人」「日本人」と認識されることもある。そうした移動と認識、あるいは民族的アイデンティティや「日本語」の位置づけは、100年の移動のなかで交錯している。

さて、日本語学校は日本人・日本語話者の訪問を快く歓迎してくれるのだが、2009年の日本語学校は様子が違った。そこには日本語話者が急増していた。2008年におきた世界的な経済不況により、突如として日本からブラジルへと帰国した子どもが、日本語という繋がりを日本語学校に求めたためである。しかし、日本語学校は、待ちに待った日本語話者の「日系ブラジル人」を戸惑いながら受け入れることになった。その多くが、ポルトガル語を話すことができない子どもたちだった。

日本からブラジルへと帰国せざるを得ない人々がいることは、ブ

ラジルでも報道されていた。「日本の生活に慣れた子どもは、ブラジルでの生活に苦勞している」。そうした報道に、日系人だけでなく多くのブラジル人も心を痛めていた。

私はブラジル各地の日本語学校に出向いて、帰国した子どものインタビューを行っていた。そして、ロンドリーナ州立大学エステラ先生の案内で、モデル校にやってきた。高速バスの発着所脇にあるレストランで、エステラ先生は帰国した日系人の子どもたちの苦境について語った。それはびっくりするくらいの熱意だった。私はその勢いにほだされて、日系人の青年に会うことになったのである。「日本から戻ってきたのだけど、こちらの生活に馴染めなかったんですね。いまでも夜中に起きるような生活、引きこもりっていうのかしら、そういった生活をしているの。精神的にまいってると思うんです」

確かに、私が出会った青年や子どもたちはブラジルでの苦勞を語った。「コンビニがない」「ブラジルの学校はルールがない」「いつか日本に帰りたい」

それはロンドリーナの青年も同様だった。2人きりのインタビューは、モデル校の図書室で行われた。年季の入った椅子に腰掛け、埃っぽい机を拭き、インタビューがはじまった。「夜中に起きているのは日本と生活時間を合わせてるんですよ。そのほうが日本の友人にも連絡しやすいし。ネットも速いんですよ」「こっちに帰ってきて、大学に行けるかもと思ったけれど、試験問題が難しすぎてだめだったんですよ」

青年は日系人と自身のギャップについても語った。ブラジルで生まれ、幼少の頃に日本へ渡った。だから日本の生活しか知らない。同じ日系人であっても、ブラジルで生まれ育った日系人と、日本で生活した日系人は違う。日系人・日本語話者ということで日本語モデル校に呼ばれることもあるが、ブラジル在住の日系人に混じって習字、太鼓はとてもできない。それはあくまで継承のための日本文化であって、いまの日本を生きる青年にとって得体のしれない日本文

化にすぎない。

青年は自身を日本人とはいわず、ブラジル人と語った。けれども、ブラジル社会に馴染めず、日系人とは折り合いをつけられない。ブラジルは自分が生活する場所ではない。家族の都合に振り回される青年の境遇に耳を傾けながら、私は暗澹たる気持ちになっていた。子どもは親も住むところも選べない。教育だって選べない。青年の「どーしてこうなったんすかねえ」というつぶやきは、どこか痛々しい。

その気持は、ひとり親家庭で育った私にも少しはわかる。生活の場所が突如として変貌し、そこは積極的な意味を有さない「なにかが失われた場所」になる。そして、自分にはどうにもできず、鈍い痛みを伴いながら、状況を引き受けるしかない。

いま、改めて青年のインタビューの録音を聞き直すと、私は努めて明るい声をだしている。青年の声は、時折震えているように聞こえる。これまでの生活の話。ブラジルでの話。そして将来の話をした。インタビューは明るい調子で終わっていた。「すぐに日本に行くんで。また会いましょう」「なにかできることがあったら、言ってくださいね」と掛け合いをしていた。

「図書室」で話したことは、なにか象徴的な出来事のように思えた。日本移民と日本語の痕跡が残る場所は、あまり使用者がいらないようだ。使われない図書室をみるに、日系ブラジル人はブラジル人になったのだろうか。確かに、青年は自らをブラジル人と表明する。しかし日本語でその窮状を語る。ブラジル人という青年との会話は、時代の節目にある日本移民の今日的な姿であるように感じられた。

私は日本に帰国し彼のことを文章にまとめた。ただし、エステラ先生がいうように精神的にまいっている、というようには書かなかった。青年は戸惑っていたし、苦しんでもいた。「寝てるときが一番安心できるんですよ」「起きても行くところがないんですよ」と語っていた。そうした青年の姿を伝えるためにわかりやすい言葉は使えない、と考えたからだ。

インタビュー後、青年は宣言通り日本へと戻った。

そして、青年とは年に1回程度会うようになった。日本の大学に進学したとき。就職が決まったとき。進路に迷ったとき。留学したとき。挫折を語ることもあったが、同時に夢も語る。「海外でめっちゃ金稼ぐんすよ」「この職場、ブラックすぎっすよ」といった他愛のない会話をした。青年はブラジルでの生活を感じさせない、日本人の青年のようにみえた。

あるとき、「山本さんが書いた文章を読んだっすよ。俺ってこんなかわいそうでした?」といわれドキッとした。手応え深く書いたつもりなのに、と。

そうみえたけどなあ、と言葉を濁したが、納得していない様子だった。そのとき私は「かれのなかでブラジルは生きていたのか」と感じた。私は青年の境遇は描いたかもしれないが、移動の意味までは捉えてなかったのかもしれない。あるいは、青年の言葉を奪ったのかもしれない。なるほど、私たちはあの図書室での会話にまだ「ケリ」をつけられていないことを知った。

そして青年は思わぬかたちで「ケリ」をつけにきた。いま、私と青年は、机を並べながらともに研究をしている。

英語もポルトガル語も日本語も扱う青年が、日本語で文章を書くとき、私の歴史的な想像力が喚起される。青年は日本人なのだろうか、ブラジル人なのだろうか、それとも日系ブラジル人なのだろうか。そうした問いも意味をなさない生き方を選ぶのだろうか。かれは歴史を継承しているのか。それともそこから切断された新しい生き方をしているのか。

ある日、青年が「エッセイを書きました、一度読んでください」と文章をもってきた。そこには自らの移動経験を問う文章が書かれていた。ブラジルから日本へ。日本からブラジルへ。そしてブラジルから日本へ。繰り返された移動を問い直す仕事は、かれにしかできないのかもしれない。

ならば、青年にしかできない仕事があるのならばみてみたいとも

思うのだ。そして、その仕事を通じて、私たちはあの図書室での会話を「ケリ」をつけることになるのだろう。